

改革・開放期中国における 超能力、気功論争

浜 勝彦

- 1 はじめに
 - 2 超能力論争の展開
 - 3 気功ブームの諸問題
 - 4 「邪教」の定義をめぐって
- 付：超能力、気功論争関連年表

1 はじめに

筆者は、2000年3月本誌に「中国における気功活動の展開と法輪功事件」という論文を発表し、政府の法輪功取り締まりの中で徐々に明らかになってきた法輪功の発展過程と取り締まりの過程を概観し、さらに、その法輪功の起源として、80年代後半からの中国における気功ブームに注目して、80年代以降の中国での超能力論争、気功ブームの実態を紹介した。⁽¹⁾

それから3年の間にこの超能力、気功論争におけるいくつかの重要な事実が紹介された。本稿ではそれらを補完したうえで、再びこの論争過程を簡単に振り返って見たい。

1980年代前半の超能力論争については、第2節「超能力論争の展開」で基本的な流れをたどって見る。80年代後半以降の気功ブームについては、第3節「気功ブームの諸問題」で、ブームの概要、中央「人体科学小組」の機

能、及びスーパー気功師である嚴新の活動に絞ってその展開を見る。法輪功事件については、第4節「『邪教』の定義をめぐって」で「邪教」の定義をめぐりいくつかの見方を紹介したい。

論争の詳しい展開過程については附録の年表(1)、(2)、(3)を参照されたい。

2 超能力論争の展開

(1) 超能力ブームの発生

1979年3月11日『四川日報』が「大足県で耳で字がわかる児童を発見」という記事を掲載した。当時は、まさに改革・開放初期にあたり、実践が真理を検証する唯一の基準であるとする雰囲気の中で、このニュースは直ちにマスコミの大きな注目を集めた。しかし、中国共産党の理論である唯物弁証法の科学理論と矛盾する内容であるために、大方の予想どおり、6月2日『人民日報』が四川省の耳で字を読む小学生の話は盗み読みによるとする「四川医学院の報告」を報道した。四川省党委員会の楊超書記がこの件で自己批判を迫られた。

しかし、ここで香港の『明報』が6月18日 李学聯署名の「耳で字を読む事は必ずしもデタラメと言えない」との大陸研究者への手紙を発表し、西欧各国の科学では耳で字を読む事はESP(超感官知覚)の初歩的常識であるとし、当局の実験を経ない論断に反論した。⁽²⁾

この論文は、当局の反応を測りかねていた人達を勇気付け、いったんブレーキがかかっていたブームに火をつけることになった。ロケット工学者銭学森、中国科学技術協会書記聶春榮らの支持の下、上海の『自然雑誌』は、超能力=人体特殊能力(中文:人体特異効能)研究支持、推進の本部となった。マスコミは全国で続々"超能力者"を発掘し、報道し、1980年2月には

『自然雑誌』社が上海で第1回人体特殊能力科学討論会を開催し、3月以降全国各地で人体特殊能力研究会、座談会が開かれ、81年1月には四川省人体科学研究会準備グループが成立、5月には重慶で、全国級の第2回人体特殊能力科学討論会が開催され、18日、中国人体科学研究会準備委員会が成立した。

(2) 批判派の反撃

人体特殊能力研究促進派に押されっぱなしの、人体特殊能力の存在を認めず、研究にも反対する于光遠国家科学技術委員会副主任、呉明喩同委員会副主任らの「ニセ科学」批判グループは、反撃に転じ、1981年10月、国家科学技術委員会政策研究室が「人体特殊能力問題」座談会を開催した。ここで国家科委政策研究室、中国科学院政策研究室、中国自然弁証法研究会共同による、「人体特殊能力問題調査研究連絡グループ」が結成された。11月、同グループは『人体特殊能力問題調査研究資料』を創刊した。

こうして、銭学森を中心とする中国人体科学研究会準備委員会、『自然雑誌』編集部、同編集部の『人体特殊能力通讯』等の人体特殊能力研究促進派と、それに対立する批判勢力が形成されたことになり、両陣営が、それぞれ宣伝、研究、論争を展開することになった。

(3) 大論争

1982年2月に中国科学院の報告会で、于光遠が人体特殊能力研究の方法論である超心理学を、神霊学でありニセ科学であると批判、『人民日報』がこれを報道したことから、両派の攻防は白熱し、中国共産党が人体特殊能力研究を公認するかどうか、党中央宣伝部前部長で、現党主席である胡耀邦の権威ある判断が迫られる事になった。

3月15日、国防科学技術委員会副主任張震寰が、『人民日報』編集長胡績

偉に手紙を書き2月の于光遠等の批判とその『人民日報』掲載に厳しく抗議し、この手紙に対して、4月10日胡耀邦は人体特殊能力に関する批示を書いた。「この問題については1979年の最初から私は疑問を持ち、3回批語を書いて、これはわれわれの研究の方向ではなく、新聞雑誌で紹介と宣伝をしてはならない、と提起した。一部では断定的なところがあったが、私の主張は根拠のあるものだった。後に私は管轄しなくなったが、新聞雑誌にかなり載った。今も私はこの二つの線を守るべきだと主張する。宣伝部門がやってもらいたい。」

この方針にしたがって、4月20日に党中央宣伝部が「新聞雑誌上で人体特殊能力を宣伝或いは批判してはならないことに関する通知」を出した。「最近中央の何人かの指導的同志は以下の見解を示した。" 耳で字を読む " 類は、われわれの研究の方向ではなく、新聞雑誌で紹介と宣伝をしてはならず、また批判の文章とニュースを発表してはならない。」

この党中央宣伝部の折衷的な指示に対して両派ともに反発した。5月5日銭学森は党中央宣伝部常務副部長郁文に手紙を送り、この文書が下部で実施されれば、人体特殊能力研究は一撃で壊滅してしまう、「私は党性をもって人体特殊能力の真実を保証する」と、含蓄のある抗議を行った。これは胡耀邦党主席に影響を与え、5月13日、胡主席は再び批示を発表した。「これはわれわれの研究の方向ではない。そして科学的にまだ十分に実証されていない前には、新聞雑誌で宣伝せず、紹介せず、また批判しない。この2か条は私が見るところ、妥当で公正なものであり、断固としてこのように行うべきである。しかし、ごく少数の人が、引き続きこの問題を研究することは許さるべきで、また彼等が小型の定期研究状況報告を出し、この方面に興味のある科学研究者に送付して閲読し、引き続き検討する事は許されるべきだ。」

胡耀邦が、人体特殊能力研究推進派への批判を許さず、また研究の継続を認め、科学的実証の可能性すらも示唆した事は、反対派に一段と大きな危機

意識を抱かせた。

5月18日 科学技術委員会副主任呉明喩が胡耀邦に手紙を書き、28日于光遠が胡耀邦に手紙を書き、いずれも4月20日の中央宣伝部通知を批判したが、時すでに遅く、6月15日中共中央宣伝部が再び「人体特殊能力宣伝問題に関する通知」を出した。胡耀邦党主席の指示により人体特殊能力の宣伝問題については、宣伝せず、批判せず、論争せず、という「三不」方針を明示したのである。「論争せず」が加わった事で、反対派が攻撃を行う手段が一層大きく制限されることになった。

1982年3月に国防科学技術委員会副主任張震寰が、気功師張宝勝の党元老達への特殊識字能力、医療効果等の実演を組織し、5月には葉劍英宅で張宝勝の気功実演を行わせていたことなどをふまえて、後に于光遠は、革命元老達への治療を気功師が止めると困るとの配慮から批判の手が鈍った、と回想している。胡耀邦の苦悩も革命元老達の意向にどう配慮するかという点にあったのではないかと想定されるのである。

3 気功ブームの諸問題

(1) 1980年代後半の気功ブーム

1950年代の第1次気功ブームに続く、第2の気功ブームは1987年から始まった。この年6月から人体特殊能力の研究、管理を担当する「四人小組」弁公室で仕事をするようになった申漳によれば、ブームの実態は次のようなものであった⁽³⁾。

気功ブームをもたらした一つの重要な要因として、気功師、研究者、老幹部、マスコミの密接な協力があり、その具体例は、嚴新、陸祖隱、張震寰、明真等の中の協力に見られるという。1987年にある新聞が一面で、嚴新が清華大学で気功外気の実験を行って重大な突破を勝ち取ったと報道。夏には

陸祖隱が興城で開かれた全国気功科学学術会議で嚴新の気功科学実験の報告を行い、ちょうどこの時、嚴新は先ず遼寧で、さらに北京、内蒙古、広東等で気功実演報告を行った。各单位は争って嚴新を招いて報告を求めた。各新聞雑誌は気功の医療奇跡と科学実験の奇跡を大いに報道し、宣伝した。嚴新ブームと気功ブームは双子のようなものであったという。

気功ブームは同時に特殊能力の宣伝に機会を与える事になった。嚴新は気功の宣伝を行う時に、特殊能力の宣伝を大に行った。気功、特に高級気功は特殊能力と密接に関連し、これらを厳格に区別する事が難しかった。気功ブームは特殊能力の宣伝にチャンスと条件を創造した。気功ブームの中で、人体特殊能力ブームが大きく復活してきたのである。

また申漳によれば、嚴新の後には、張宏堡、張香玉、張小平、沈昌、狄玉騎、陳林峰、張致祥、田瑞生、李洪志等の「気功大師」が続々と現れて、それぞれ二、三年世の中を騒がせた。その内の何人かは、自己造神能力は嚴新に劣らなかったが、その他の面での品格は、はるかに嚴新に及ばなかった。一部の人は、まったく気功事業の発展のために気功の科学実験を行うのではなく、きちがいじみて金儲けを図り、迷信を宣伝し、名を騙り、利を騙り、色を騙り、財を騙った。張香玉、張小平は、気功界のならず者であった、という。

(2) 人体特殊能力研究管理小組

伍紹祖は、「文化大革命」中は王震副総理秘書を勤め、後に国防科学技術工業委員会に入って 1985 年には政治委員を務めていた。伍紹祖は、中央宣伝部と国家安全部の二人と合同で上層部に手紙を書き、人体特殊能力の科学上の意義、および国防と安全の面での可能な応用価値を述べ、3人でグループを作り、特殊能力研究及び政策と管理の責任を負う事を申し出た。この件は党中央責任者の同意を得て「3人小組」が成立した。張宝勝を代表とする人体

特殊能力研究は秘密裏に推進する事が確定し、張宝勝は伍紹祖の指導の下に507研究所（国防科学技術委員会所属の宇宙生理学研究所）に在籍した。1987年に、国家科学技術委員会の郭副主任が加わって「4人小組」となった。

1989年には、伍紹祖が国家体育運動委員会主任に転じ、1990はじめには郭副主任が転勤になったため、「4人小組」の活動が停止した。夏に4人が連名で事業の継続を上申し、12月には「6人小組」発足した。伍紹祖が組長で、成員には衛生部の陳部長、国家科学技術委員会の李副主任、中央宣伝部責任者、等6人からなっていた。

1991年2月に第1回会議が開かれた。内容は四つの強化で、指導の強化、管理の強化、事務機構の強化、科研の強化であった。「6人小組」は、成員の変動で、後に人体科学工作組と改称した。伍紹祖組長が国家体育運動委員会主任となったため、人体科学工作組弁公室は体育運動委員会武術研究院に置かれ、同院院長が弁公室主任を兼任することになった。

于光遠は、自然科学にしる、社会科学にしる中央指導小組という組織は存在しておらず、ただ人体科学だけが中央指導小組を持っている事自体が異常なことである、と述べている。⁽⁴⁾この中央指導小組の存在が気功ブームに巨大な推進力を与えたことは間違いない。

(3) 嚴新の気功活動

1986年11月18日『光明日報』は、中医、気功、武術、特殊能力を一身に備えた中医師嚴新が重慶から多数の病人を治療しつつ北上、と報道、1987年1月24日には『光明日報』が一面で、嚴新と清華大学が気功外気で各種水溶液を変化させる実験に成功したと報道した。

この年2月には党中央のある指導者が、嚴新と清華大学の実験の代表に対して「気功は迷信ではなく、科学である。これは反対するな、宣伝するな、という問題ではない。大いに宣伝すべきであり、この科学研究の深化を促進

し、四つの現代化に役立てるべきである」と述べた。これ以降嚴新の人気は急上昇して気功界の最も輝かしいスターとなった。⁽⁶⁾また1987年1月の胡耀邦失脚直後のタイミングであることから考えると、これは胡耀邦の「三不方針」が事実上否定されたことを意味していたのである。

1988年秋、嚴新がこの年2度目の香港訪問を行ったとき、香港の科学界では香港中文大学の甘巨廷博士が先頭に立って嚴新の実験報告は何も証明していないと反論し、半年で香港では気功熱がさめて、気功と特殊能力討伐ブームへと180度の転換が見られ、これは大陸にも反映されたという。さらに医師張洪林らの調査に基づいて1989年4月、『健康報』が、清華大学当局が、嚴新の実験と清華大学とは関係が無く、科学研究とは評価しない、とコメントしたと報道し、嚴新気功熱は急速に衰えた。

嚴新はこの後、活動の舞台をアメリカに移した。1990年6月に初めて訪米。1991年7月には北米で国際嚴新気功科学協会が成立、1995年6月にはイェール大学で初の嚴新気功科学シンポジウムが開かれ、1996年7月27日ハーバード大学で「中国気功熱の啓示」と題する講演を行った。中国では、1994年4月1日に中共中央組織部で、97年1月には中共中央党校で講演を行っている。

嚴新が最近力を入れている研究は、第1に「辟穀」すなわち水以外は取らない断食で、6年半水だけで成長している女学生がいるという。第2はアメリカから中国まで10000キロの長距離から気を発して物質構造を変化させる実験である。第3は気による遺伝因子転換の実験で、癌細胞の良性化、薬品会社での抗生物質生産等への応用であるという。

嚴新の事例からは、嚴新の特殊能力の感化力が極めて強い事がうかがわれると同時に、気功外気と特殊能力の実証には多くの問題が存在している事がわかる。また、国内で抵抗に会うとアメリカに舞台を移すというパターンは多くの気功師に見られるもので、法輪功の李洪志も嚴新のこのパターンを継

承したものと考えられるのである。

4 「邪教」の定義をめぐって

(1) 現代中国における「邪教」

中国警察学会副会長である譚松球によれば、1979年以降、改革・開放期に中国ではキリスト教または仏教の看板を掲げた非法組織が 14 出現し、活動は極めて活発であったという。その中には国境外から浸透したのものも、国内で自生したのものもあった。主なものとしては、次のようなものがあげられている。⁽⁶⁾

外来のもので最大のものは「呼び声派（呼喊派）」で、山東省出身のプロテスタント李常受がアメリカで「地方教会」を広め、これが1979年から中国に普及をはかり、1983年には主として華中360県市で、20余万人に信徒が拡大した。共産党、政府、既存「三自」教会を攻撃した。「呼び声派」地方幹部の中からそれぞれ独立して教組となり、一派をかまえたものには、「被立王」、「中華大陸行政執事站」「全範圍教会」があり、「主神教」主の劉家国は「被立王」幹部が独立したものである。そのほか外来のものとして「達米宣教会」（韓国プロテスタント系）、「The Children of God 天父の儿女」（米キリスト教系）、「新約教会」（香港プロテスタント系）、「靈仙真仏教」（台湾系）、「観音法門」（台湾系）、等があげられている。

土着のものとしては、プロテスタント系の「門徒会」があり、安康地区など陝西、四川、湖北の辺鄙な境界地帯に勢力を伸ばし、1990年には信徒が3.7万人に達し、地方政権の機能を代行する勢いを見せた。また、プロテスタント系の「靈靈教」は長江デルタで1万人の信徒を数えた。

こうした新しい状況に対処するために中国警察学会では、1995年11月に、旧社会のいわゆる「邪教」と異なった新しい「邪教」の概念を提起した。⁽⁷⁾

それによれば、邪教組織の共通の特徴は、次の点にあった。「少数の不法分子が、憲法と法律に違反して、宗教の外衣をかぶり、宗教經典中の片言双句を取り出して、大量の封建迷信と異端邪説を混ぜ合わせ、人心を惑わせ、大衆をごまかし欺き、秘密裏に結集して非法組織を打ち建て、違法犯罪活動に従事する。」

(2) 「邪教」の新しい定義

法輪功組織が引き起こした1999年の4.25事件以降、10月30日、法律の形で「邪教」は次のように定義された。

「宗教、気功その他の名義を騙り設立し、首領を神格化し、迷信邪説を利用、製造、散布する等の手段により他人を惑わし騙し、メンバーを拡大しコントロールし、社会に危害を与える、非合法組織である。」理論家はこの「邪教」の特徴を、「教主崇拜、邪説編造、錢財収奪、秘密結社、社会危害」と整理した。

法輪功信徒の4.25事件の結果として、「邪教」の定義には、宗教のほかに、「気功その他の名義を騙り」が追加され、さらに「首領を神格化し」という条件が加わったのである。

2000年11月に北京で開かれた「邪教問題國際シンポジウム」で、中国の専門家陸純本は、「邪教」の新しい定義について、次のような解説を行った⁽⁸⁾。

邪教は、中国においては、会道門(旧中国の民間宗教団体や秘密結社)型、気功型、教会型の三つの表現形態があり、法輪功は気功兼会道門型であり、安徽の「被立王」は教会型に封建的色彩が加わった典型である。邪教の認定においては私は三つの異なった次元から考察できると考える。第1は教主の自己神化で、これには恐怖の造成と信徒のコントロールが含まれる。第2は教主の私欲であり権力欲、財欲、色欲が含まれる。第3は社会への危害である。言い換えれば、宗教性、道徳性、社会危害性の三つの方面から考察する

という事である。

さらに陸純本によれば、邪教と異端教派の最大の区別は邪教には神格化された教主があり、異端教派には教主が生れないという事である。邪教と新宗教は教主の存在形式で似たところがあるものの、邪教は強烈に教主を神格化し、いつもいわゆる予言や自然現象を利用して、「末日論」を散布して、恐怖の雰囲気を製造し、人の精神を窒息させ、教主の神威を際立たせ、入教を誘い、信徒をコントロールするものである。邪教にはほとんどどんな理性的成分も無いが、新宗教は宗教理念を通じて伝教し、信徒の理性的志向は邪教より強く、この点が両者の区別を示している。したがって、教主を神化し、恐怖を製造することが邪教の重要な特徴の一つとなっているのである。

(3) 「邪教」問題への異見

中国内部では、「邪教」の新しい定義の妥当性や操作性について各種の議論が見られる。その一部を紹介してみよう。

実際操作性の面からの批判的意見としては、次のようなものがある。

山西省の農村はキリスト教の非法宗教活動において、非法布教活動がもつともはなはだしいという。非法な私設集会所が多く、臨汾市では99年に登録集会所170余カ所に対して、私設集会所が80余カ所に達している。晋城市では1年で非法集会所がコントロールする信徒が全体の3分の1に達した。数千人の信徒が地方政府機関に集まって圧力をかける事件も発生している。

調査を行った山西大学法学部の専門家によれば、これら組織を取り締まるのに「首領を神格化し」という項目に該当しないために、「邪教」の規定を援用できない。また、宗教管理部門には非登録の私設集会所の非法伝教組織に対する管轄権が無く、公安部門では既存の「治安管理处罰条例」、「集会デモ法」等の法律にもぬけ穴が大きくて、管理に真空をもたらしている。このため社会に重大な危害をもたらす非法伝教組織を取り締まるのに具体的に有効

な規定に改定するよう提案している。⁽⁹⁾

独自に法輪功問題の総合的調査を行って本を書いて香港で出版した中国科学院国情研究センターの康曉光研究員は、「正教」、「邪教」という神経過敏な用語の使用に反対し、「老宗教」「新興宗教」「温和宗教」「激烈宗教」「安全宗教」「危険宗教」等の形容詞を使うべきだと述べ、「邪教」の代わりに「危険宗教」とするのが比較的妥当であろうとする。⁽¹⁰⁾

康曉光によれば、ある宗教が「安全」か「危険」かをあらかじめ予測する基準として、次の4点に該当する宗教は「危険」であるとする。第1、現実社会を徹底的に否定する。第2、現世における救済を追求する。第3、そう遠くない将来における具体的終末の時期を称える。第4、生きている教主が存在し、これを崇拜する。法輪功はこれら全ての条件にあてはまるので「危険宗教」であるといえる。しかし、「危険宗教」の認定とこれを権力が暴力で鎮圧する事とは別であって、鎮圧は犯罪事実を根拠として、法律を準拠とすべきであり、推論による断定と予測を根拠とすることは出来ない。

法輪功を科学に対立する迷信であるとして、科学を普及すれば法輪功を消滅できるという主流の考え方はおろかであり、法輪功が満足させているのは実は人々の信仰にたいする需要であり、科学を崇揚することは人の信仰にたいする需要を消し去る事も満足させる事も出来ない。中国は現在、前代未聞の社会変革を経ており、したがって前代未聞の新興宗教を胚胎しつつあり、法輪功は中国大陸の新興宗教運動の序曲に過ぎない、と康曉光は言う。

注

- (1) 浜勝彦「中国における気功活動の展開と法輪功事件」『創大中国論集』第3号 2000年3月 ppl-57
- (2) 申振鈺、曾昭貴、徐昇国著『正与邪—科学与特異效能偽気功及邪教大論戦』群衆出版社 2001年7月 p27
- (3) 申漳『天惑—特異功能与気功探秘』華夏出版社 1997年 pp69-74

- (4) 申振鈺、曾昭貴、徐昇国著『正与邪—科学与特異効能偽気功及邪教大論戦』群衆出版社 2001年7月 p167
- (5) 申振鈺、曾昭貴、徐昇国著『正与邪—科学与特異効能偽気功及邪教大論戦』群衆出版社 2001年7月 p172
- (6) 蔣嘉森著『毒瘤—当今中国形形色色的邪教組織』群衆出版社 2001年6月
- (7) 譚松球「前言」、蔣嘉森著『毒瘤—当今中国形形色色的邪教組織』群衆出版社 2001年6月所収
- (8) 『論邪教—首届邪教問題國際研討会論文集』広西人民出版社 2001年1月 p16
- (9) 周子良、焦艶鵬「山西農村非法伝教問題的調查与法律思考」『晋陽学刊』2002年4号
- (10) 康曉光『法輪功事件全透視』明報出版社 2000年10月

超能力、気功論争関連年表

(1) 超能力（人体特殊能力）論争年表

-
- 1979 3.11 『四川日報』が「大足県で耳で字がわかる児童を発見」との記事を掲載。
 6.2 『人民日報』が四川省の耳で字を読む小学生の話はニセモノとする「四川医学院の報告」を報道。
 6.5 四川省党委員会の楊超書記が前記耳で字を読む小学生の件で自己批判。
 6.18 香港『明報』が李学聯の「耳で字を読む事は必ずしもデタラメと言えない」との大陸研究者への手紙を発表。
- 1980 2.4~10 上海で『自然雑誌』社が第1回人体特殊能力科学討論会開催。
 10.15 『自然雑誌』編集部が『人体特殊能力通讯』を創刊。
- 1981 5.11~18 重慶で、全国第2回人体特殊能力科学討論会開催。18日、中国人体科学研究会準備委員会成立。
 10.9~10 国家科委政策研究室が「人体特殊能力問題」座談会を開催。国家科委政策研究室、中国科学院政策研究室、中国自然弁証法研究会が共同で、「人体特殊能力問題調査研究連絡グループ」を結成。
 11.30 「人体特殊能力問題調査研究連絡グループ」が『人体特殊能力問題調査研究資料』を創刊。
- 1982 2.24 中国科学院の報告会で、于光遠国家科学技術委員会副主任が人体特殊能力研究の方法論超心理学を、神霊学でありニセ科学であると批判。『人民日報』がこれを報道、解説。

- 3月 国防科学技術委員会副主任張震寰が、党元老達への張宝勝の特殊識字能力、医療効果等の実演を組織。5月葉劍英宅で張宝勝の気功実演。
- 3.15 国防科学技術委員会副主任張震寰が、『人民日報』編集長胡績偉に手紙を書き2月の于光遠等の批判に厳しく抗議。
- 3.31 中共中央の「我国社会主義時期の宗教活動に関する基本観点及び基本政策」発表。
- 4.10 胡耀邦の人体特殊能力に関する批示「この問題については1979年の最初から私は疑問を持ち、3回批語を書いて、これはわれわれの研究の方向ではなく、新聞雑誌で紹介と宣伝をしてはならない、と提起した。一部では断定的なところがあったが、私の主張は根拠のあるものだった。後に私は管轄しなくなったが、新聞雑誌にかなり載った。今も私はこの二つの線を守るべきだと主張する。宣伝部門がやってもらいたい。」
- 4.20 党中央宣伝部が「新聞雑誌上で人体特殊能力を宣伝或いは批判してはならないことに関する通知」を出す。「最近中央の何人かの指導的同志は以下の見解を示した。"耳で字を読む"類は、われわれの研究の方向ではなく、新聞雑誌で紹介と宣伝をしてはならず、また批判の文章とニュースを発表してはならない。」
- 5.5 銭学森が党中央宣伝部常務副部長郁文に「党性をもって人体特殊能力の真実を保証する」との手紙を送る。
- 5.13 胡耀邦党主席、人体特殊能力問題に関して批示を発表。「これはわれわれの研究の方向ではない。そして科学的にまだ十分に実証されていない前には、新聞雑誌で宣伝せず、紹介せず、また批判しない。この2か条は私の見るところ、妥当で公正なものであり、断固としてこのように行うべきである。しかし、ごく少数の人が、引き続きこの問題を研究することはゆるさるべきで、また彼等が小型の定期研究状況報告を出し、この方面に興味のある科学研究者に送付して閲読し、引き続き検討する事は許されるべきだ。」
- 5.18 科学技術委員会副主任呉明諭が胡耀邦に手紙を書く。28日、于光遠が胡耀邦に手紙を書く。いずれも4月20日の中央宣伝部通知を批判。
- 6.15 中共中央宣伝部が「人体特殊能力宣伝問題に関する通知」を出す。胡耀邦党主席の指示により人体特殊能力の宣伝問題については、宣伝せず、批判せず、論争せず、という「三不」方針を明示。

(2) 気功ブーム関連年表

- 1985 この年、国防科学技術工業委員会政治委員伍紹祖は、中央宣伝部、国家安全部と協議して、特殊能力の研究と政策、管理に責任を負う「3人小組」を設置。87年には国家科学技術委員会の郭副主任を加えて「4人小組」を結成、1990年には「6人小組」を再結成。

- 1986 4.30 中国気功科学研究会北京で成立大会。理事長張震寰。
 5.26～31 人体科学代表大会開催。人体科学研究会正式成立。
 11.18 『光明日報』、中医、気功、武術、特殊能力を一身に備えた中医師嚴新が重慶から多数の病人を治療しつつ北上、と報道。
- 1987 1.24 『光明日報』、一面で、嚴新と清華大学が気功外気で各種水溶液を変化させる実験に成功したと報道。
 5.3 国家科学技術委員会の批准のもとに中国人体科学学会正式成立（理事長張震寰）。錢学森が「人体科学は現代科学技術体系中の一大部門である」との報告を行う。
 8月 張宏堡が中華養生益智功（中功）の普及を開始。
- 1988 3～4月 カナダの魔術師ランディを団員とする「所謂超常現象科学調査委員会」訪中団が、『科技日報』の招きで訪中。
 3月 国家科学技術委員会、中央宣伝部、中国科協が「気功の社会活動と宣伝報道工作に関する通知」を出す。
 5.8 田瑞生が、香功（中国仏法芳香型智悟気功）の初級、中級功の普及を開始。
 5.13 張宝勝が報告実演会を行い、批判派の前で実験に失敗。この件は1995年に公表される。
 6月 四川省成都の方宗驊が政府から副主任医師級高級気功師に認定さる。
- 1989 4.13 『健康報』が、清華大学当局の、嚴新の実験と清華大学とは関係が無く、科学研究とは評価しない、とのコメントを発表。
- 1990 3.18 張香玉が「アジア大会」募金と銘打って北京北大平荘で万人気功実演大会を開始。12月5日、不許可医療活動展開等の嫌疑で逮捕さる。
 5月 『中国人体科学』誌創刊。
 8.10 北京科学会堂で、「科学気功を尊重し、封建迷信を暴露する」報告会開催。司馬南が「特殊能力」のトリックを暴露。
- 1992 5月 李洪志が長春で法輪功の普及を開始。
- 1994 12.5 中共中央、國務院が「科学技術普及工作进行を強化することに関する若干の意見」を出す。
- 1995 4月 「万法帰一功」の張小平が逮捕さる。
 5.28 全国科学技術大会開催。偽人体科学、偽気功、所謂人体特殊能力への批判高まる。
 8.5 柯雲路が1994年に香港認可で創設した「中国生命科学研究院」に対して、中国気功科学研究会が中国での認可申請却下を指示。
- 1996 6.12 党中央宣伝部、国家科委、中国科協が連名で「科学普及宣伝工作进行を強化する事に関する通知」を出す。
 10月 北京市中級法院が、報道を名誉毀損とする沈昌の『工人日報』に対する告訴を却下。

- 11月 中国気功科学研究会が、法輪功の直属功法登録を取り消す。
- 1997 3.30 『国際気功報』が発禁に。
- 7.23 胡万林が西安市長安県に終南山医院を開業。98年2月27日に手入れ、6月15日 河南省商丘市に衛達医院を開業、99年1月胡万林に逮捕状執行。12月 商丘市中級法院で公判開始。
- 4.25 法輪功学習者による中南海包囲事件。
-

(3) 法輪功事件関連年表

- 1952年 7.7 李洪志、原名李来、吉林省公主嶺市に生まれる。69年中学卒業。
- 1970年 軍に入り、総後方勤務部201部隊「八一」軍馬飼育場毛沢東思想宣伝隊ラッパ手。72年12月吉林省森林警察支隊宣伝隊所属。78年5月同支隊の招待所服務員。
- 1982年 4月 長春市糧油食品供給総公司保安課勤務。
- 1988年 1月 吉林省気功科学研究会康復センター気功師の李衛東から「禅密功」を、気功師の于光生から「九宮八卦功」を習う。
- 1990年 5月～9月 一家でタイに妹に会いに行く。
- 1991年 職籍だけ保持して気功普及活動に乗り出す。
- 1992年 5月15日 長春で第1回法輪功研修班を実施。
- 1993年 首都北京で法輪功を普及。4月『中国法輪功』を出版。
 1月5日 中国法輪功総ステーション名で「中国法輪功章程」を制定。
 7月30日 法輪功研究会設立。法輪大法研究会の前身。
 8月 中国気功科学研究会が、法輪功を直属功法分会とする。
- 1994年 初め、初期の弟子である宋炳辰ら8人が上部機関に李洪志告発の手紙を出す。
 9月24日 李洪志、生年月日を1953年7月7日から1951年5月13日に変更。
 12月 経典『転法輪』を出版。
- 1995年 4月15日に宋炳辰が、4月20日に趙傑民が、中国気功科学研究会指導者に李洪志告発の手紙を出す。
- 1996年 6.17 『光明日報』辛平論文「ニセ科学反対で警戒を要す—『転法輪』の本からの話題」発表。8月法輪功練習者が『光明日報』社前で対話を要求。
 9.12 中国気功科学研究会が関連部門に、「李洪志『法輪功』問題に関する状況報告」を提出。
 10月 旅行ビザでアメリカに行き普及活動を行う。
 10月 北京大学教授来樹民が江沢民総書記に法輪功は気功の外衣をまとった新宗教との手紙を出す。

7.24 国家新聞出版署が『転法輪』『中国法輪功』等の出版物を禁書とする。

11.28 中国気功科学研究会が法輪功の「直属功法」の資格を取り消す。

1998年 2月 李洪志がニューヨークに居を定める。

4月 法輪功学習者の山東省『齊魯晩報』社包囲事件。5月 北京テレビ包囲事件。

1999年

4.19 天津師範大学で、法輪功学習者が『青少年科技博覧』の論文に抗議して座り込み開始。

4.22 李洪志アメリカから北京入り。24日香港へ。27日オーストラリアのブリズベンへ。

4.25 朝早くから、一万人を超える法輪功の学習者が中南海を包囲。

4.30 李洪志、シドニー入り。中南海事件への直接的関係を否定。

6.2 李洪志、「私の感想」を発表。

6.7 香港各紙、法輪功学習者集団が第二次示威行動に移ったと報道。

7.19 「中共中央の共産党員が『法輪大法』を修練してはならないことに関する通知」発出。同日夜から、20日未明にかけて、中国各地で法輪功幹部の一斉摘発が行われる。

7.22 中国民政部の「法輪大法研究会取締りに関する決定」。法輪功と李洪志一斉批判開始。

7.29 公安部が李洪志を国際指名手配。

10.30 全人代常委「邪教組織の取締り、邪教活動の防止と処罰に関する決定」。

11.12 海南省海口市中级人民法院が法輪功中核分子宋岳勝等4人に有期懲役刑を判決。

12.16 北京市第1中级人民法院は、法輪功中核分子である李昌、王治文、紀烈武、姚潔に対してそれぞれ18年以下の有期懲役判決を下す。

12.23 台北で行われた「法輪大法燭光晚会」に民主進歩党の呂秀蓮が出席し、法輪功の活動を支持する演説を行う。

2000年

2.4 旧正月前夜、天安門広場で法輪功信者が活動、9人逮捕。4月13日100余名の法輪功信者が天安門広場に集合。

3.16 米国国際宗教委員会がロサンゼルスで開いた「中国における宗教の自由」公聴会に法輪功中核分子の張爾平が出席。

3.22 北京軍事博物館で『科学文明を尊重し、迷信愚昧に反対する』大型展覧会開幕。

8~9月 国連千年首脳会議と議長大会開く。ニューヨークで法輪功グループが抗議、宣伝活動を展開。

10.1 国慶節に天安門広場で活動の法輪功信者1373人を警察が拘束。

11.13 中国反邪教協会北京で成立大会開催。

11.9~11 北京で、中国国際友誼促進会(社会問題研究交流センター)がアジ

アで初の「邪教問題国際シンポジウム」開催。

12.23 台北での「法輪大法2000年交流会」で民主進歩党の呂秀蓮が挨拶。

12.23 北京中国科技会堂で「邪教反対、人権保障—中国反邪教協会第1回報告会兼学術討論会」開催。

2001年

1.1 天安門広場で活動の法輪功信者2626人を警察が拘束。

1.23 7人の法輪功信者が旧正月大晦日に天安門広場で焼身自殺を図る。二人が死亡。

1.31 科学技術界人士が「法輪功」邪教組織を批判暴露する座談会を開く。

1月 中国反邪教協会が百万人署名運動開始。

4.17 グアムで密入国し収監されていた中国気功師張宏堡を、アメリカ政府が釈放。

11月 中国国際友誼促進会が北京で「邪教極端行為シンポジウム」を開催。

2002年

2月 旧正月に、カナダ、イギリス、オーストラリア等の国からの59人の法輪功活動家が天安門広場で活動し、拘束、強制送還された。

3月 吉林省長春市で、有線テレビの画像が法輪功の宣伝画像に切り替えられた。

6.23～30 テレビ用衛星「シノサット1」が法輪功分子の電波攻撃を受け、中央テレビ局9番組と、四川、雲南、貴州、等10の省級テレビ局が重大な妨害を受けた。

9.8 「シノサット1」衛星が再び法輪功分子の電波攻撃を受けた。国务院台湾弁公室責任者は、電波が台湾の台北地区から発射されたと、台湾当局を非難。
